

2014年6月

## ICSB ダブリン大会参加記

三井逸友 JICSB 中小企業研究国際協議会日本委員会委員長  
(嘉悦大学大学院教授・横浜国立大学名誉教授)

緑濃く、明るい日差しの照りつける6月のアイルランドダブリンに、世界の研究者、実務家、教育者らが集まり、ICSBの第59回世界大会が6月11日-14日にわたって開催されました。会場はダブリン市南部の住宅地に位置するダブルツリーヒルトンホテルで、参加者数は登録ベースで60カ国・約600名、のべ830名と発表されております。

今回の大会は「企業家精神と持続可能性」(Entrepreneurship and Sustainability)と題されており、文字通りに企業家精神の意義やその推進のための諸課題、教育と人材育成、環境問題や社会問題と中小企業の果たす可能性などに関する議論が、全体会シンポジウムなどにおいて顕著に示されておりました。

6月12日朝の開会式では、大会組織委員長であるトーマス・クーニーDITダブリン工専教授の司会で、ジェフリー・アルブスICSB会長、リチャード・ブルトンアイルランド政府労働イノベーション担当相、ザビエル・モネ欧州委員会教育訓練総局副総局長が立ち、経済危機を乗り越え、中小企業の力で社会の持続的発展を期そうという願い、またそのための起業家教育の重要性がこもごも語られました。

11日には開会前行事として、恒例のドクトラルデイのほか、EU/OECDワークショップ、GEM政策フォーラム、企業家の日、女性企業家フォーラム、メンタープログラムなどが開かれています。下記のACSIBの件などもあり、私を含めて日本からの参加者はこれらには参加できておりません。残念ではあります。

12日の開会式後、各分科会が始まりました。3日間にわたり、14分科会、のべにして500コマ、実数では400人近くの研究発表があるのですから大ごとです。これらはすべてダブルツリーヒルトンホテルの中の会場で行われました。このほかに23本のポスターセッション発表もありました。

これらの発表のすべてはもちろん聞くことができませんが、毎回のことながら、研究の「方法論」や政策概念をめぐる議論が目立つほか、ファミリービジネス、ジェンダーと女性企業家、エスニック/マイノリティビジネス、持続可能性と中小企業、イノベーションと中小企業などをめぐる研究成果の発表が特徴的でした。特に私の記憶に残るのは、「起業家教育」をめぐる議論がさまざまな経験から語られていたこと、「ecosystem」「cultural capital」などの近年の造語が広く用いられたこと、また「venture」「new venture creation」といった語が定着していることなどでしょうか。アイルランドの経済発展と中小企業に関する研究成果を聞けなかったのは心残りでした。そうした発表も予定されていたのですが。

日本からは、JICSB会員である岡室博之氏(一橋大学)、加藤敦氏(同志社女子大学)、山本聡氏(東京

経済大学)、丹下英明氏(日本政策金融公庫総合研究所)がそれぞれ分科会での研究発表を行い、久保田典男氏(島根県立大学)がポスター発表を行いました。岡室氏は二本の発表です。

このほか、田路則子氏(法政大学)、播磨亜希氏(ブレーメン大学中小企業・企業家研究所)も研究発表をされ、さらに堀潔氏(桜美林大学)や私なども加えるとのべ12名と、日本関係の参加者も賑やかになりました。

今回の大会では、会場で資料やプログラムのたぐいは一切配付されず、すべて電子情報化・web提供になっていたことに加え、分科会でもpptなどを用いずに「TEDスタイルで」発表と討論を行うことが奨励され、また分科会座長も一切置かれなかったことが特徴的です(大会後半にはさすがに、全発表を掲載したプログラム一覧表のコピーが受付に用意されていましたが)。しかしこれらは功罪半ばであると思います。pptなどによる重要な情報の投影もなく、配布物もないままに、実証的な研究内容が語られても、非常に理解をしにくく、言葉の問題もあって、よくわからないままに終わる恐れがあります。TEDスタイルで「メリハリ」効かせた、論理や概念や意見主張などに関し、対話的方法で理解を図っていくなどというのは、やはりこうした場にはなじまないところが多すぎましよう。座長がいないのも、全体の進行や時間調整、論点の交通整理などがなくままに、発表者たちがちょっと戸惑いながら自分ですすめるかたちになってしまいますし、各分科会ごと発表者ごとの時間をそろえ、あちこち聞きに行く人の便に寄与するようにはなっていません。

こんどのICSBでは重要な決定がいくつかありました。一つは、来年の第60回記念大会が予定されていた中国青島ではなく、アラブ首長国連邦のドバイに変更されたこと、それに伴いさまざまな変更が生じたことでしょう。UAEU大学が中心となり、来年6月の前半に開催予定としか発表されていません。2年前に決まっていた青島開催ができなくなったことにはいろいろ危惧もされるのですが、諸般の事情がからんでいるようです。ドバイにはICSB組織さえまだないものの、取り急ぎ準支部(chapter)が設立されるようです。なお、2016年6月のICSB第61回大会は米国ニューヨークで開催されること、すでにアナウンスされています。

マレーシアのICSMEEが新たなICSB支部として承認されました。これは後で記すように、アジア組織にとっても重要な進展です。

6月11日にはACSBアジア協議会の理事会がトリニティカレッジ内で開催され、メンバーであるJICSBからも委員長の私と、副委員長の加藤氏が参加をしました。そこでは既定の本年度ACSB大会のソウル開催(2014年10月27~31日)の確認、ACSB副会長に岡室博之、高橋徳行両氏が就任していることを含めた人事運営体制の確認、参加組織の拡大に伴う人事と担当の再調整実施のほかに、来年にはICSMEEの主催により、2015年10月26~30日にマレーシアサラワク州ミリ市でACSB大会を開催するという案が協議され、承認されました。サラワク州(ボルネオ島)での開催には旅程の問題などありますが、マレーシア政府、サラワク州などが熱心に動いており、会場も立派なもので、盛大で実りあるものとなることが期待されています。このほか、ICSBメンバーになったマレーシアICSMEEのACSB参加に加え、オーストラリア・ニュージーランドの組織であるSEAANZの参加も要請され、応諾を得ました。次回

事会は 10 月のソウル ACSB の際にかかれます。

14 日朝にはさらに、SEAANZ のティム・マツアロール氏（西オーストラリア大学）の要請で、ACSB の今後の活動に関する意見交換と懇談の場が設けられ、キム会長からいくつかの提案がありました。今秋の ACSB2014 を機に、ACSB としての情報交換や共同研究、事業化などの展望が示され、議論が深められました。SEAANZ や韓国は共同研究の展開につよい意欲を示しています。今後 JICSB としても、どのようなかたちで関わり、具体的に取組んでいくのか、ヒトカネの問題を含めて検討が必要です。また ACSB2014 では青年企業家のフォーラムを持ちたいという、キム会長からの提案がありました。

13 日夜には市長公邸であるマンションハウスにて恒例のガラディナーパーティが開かれ、多数の参加者で大変に賑わいました。チャールズビラーズ元会長はじめ、ICSB の功労者への表彰、今大会の優秀発表の表彰などが行われ、あとは賑やかなケルト音楽の演奏でのダンスパーティになだれ込んでいました。

翌日もまだ各分科会発表も続くのですから、大変であり、体力も必要です。

14 日、お疲れの中でも各分科会は続行、熱心な議論が行われていました。特に、「起業家教育」に関しては、「やろう」という話の段階ではなく、多くの実践経験や試行錯誤、さまざまな調査や議論を踏まえて、あり方自体を見直し評価していくという研究が目立ったのが特徴的でした。

昼からは閉会全体会で、インドの女性企業家マディ・シャルマ氏の「ゼロからのスタート」に伴う経験にもとづく強烈な講演があり、その後 ICSB 新会長に就任したルーベン・アスクア氏（アルゼンチン）のスピーチ、次期開催地ドバイの UAEU 大学モハメッド・アルバイリ氏からの紹介、開催案内と、「異例ながら」契約サインの儀式が行われました。

問題の 2015 年ドバイ ICSB 大会については、のちに理事会で日程調整が行われ、2015 年 6 月 6 日から 9 日と定められました。この理事会は、14 日午後 4 時間にわたって開かれ、アスクア会長、タラビシー専務理事、アルブス前会長、キム次期会長はじめ、各国の組織代表が参加しました。今年度からの組織改革実施で理事の数が減らされ、日本は理事ではないのですが、「投票権を持つ」理事とそれ以外というかたちで、柔軟な出席の扱いです。ですから三井と岡室副委員長も参加しました。昨年のプエルトリコ大会の際の理事会には、日本支部を代表して加藤副委員長が参加しています。

理事会での大きな論点となったのは、ひとつには各国支部の状況であり、カナダの支部が会員減に悩んでいる一方、広い国土もあって活動がしにくいことが述べられ、「地域」組織に改編ができないかという意見が出ました。ECSB 欧州協議会（支部）のように各国を越えた単位です。欧州の場合各国ごとの支部組織はなく、支部組織を集めた ACSB とは異なり、ECSB 会員としての参加です。これに似たような組織を米大陸にも作ろうというのですが、その区分をどうするか等でいろいろ意見が出て、持ち越しとなりました。ドバイのことも含め、中東協議会という線も示されました。

いまひとつは ICSB への会費未納がおこっている支部の問題で、出席がなかったブラジル、ロシア、昨年度世界大会開催時の支部登録会員数で理解の食い違いがあるプエルトリコといったところの件で、連絡ないところには会員権停止を含めて今後の未納請求と協議が確認されました。

一方では新しい組織としてのメキシコ代表からの加盟申請が出され、組織の状況や展望が紹介されましたが、理事会の議論としては、この組織自体が作られたばかりであること、その国を代表するものと確認できるか等の意見もあり、結論として「条件付き支部承認」のようなかたちになりました。一定期間活動状況を見て、正式承認となるものです。メキシコに支部ができると、うへの米大陸の組織改編にもからんできます。マレーシアの支部承認を含め、新たな組織形成という拡大の方向もあるわけです。

議論が沸いたのは、OECD の調査プロジェクトや人材育成などの外部の委託事業を ICSB として担い、収入も稼ごうという方向をめぐってでした。当然国際事務局として、こうした取り組みを進めたい意欲があり、また韓国は ACSB としてやる気があるわけですが、ICSB がそういう活動に適しているのか、目的に沿うのか、組織体制運営体制などどうするのかなどの疑問や批判も出て、議論百出で、審議未了のかたちとなりました。とりあえずは、情報提供などにつとめるという了解です。これもあって、4時間の長丁場の会議になったわけです。

理事会のはじめには今次大会組織委員長のクニー氏から経過報告もありましたが、大会構成のみならず、開催の資金面等では相当の苦労もあったようです。スポンサーが容易に集められなかったこと、それもからんで資金繰りに困り、ECSB からの前借りという形をとったことなどでした。大会開催はやはり大変のようです。

私個人にはアイルランドという地自体、かねてからの経済発展・産業発展の重要なモデルとしての研究関心対象でもあり、1999 年以来何度かにわたって訪れております。この間のダブリンの変貌発展ぶりも驚くばかりのものです。2008 年の世界金融危機はアイルランドにバブル崩壊をもたらし、相当の困難に陥ったものの、たくましく再生と発展の道をまた歩み出しており、ダブリンのまちはどこも賑わっております。相変わらず本場のギネスが味わえるのも、訪問者には嬉しいことです（12 日のソーシャルプログラムは、ギネス工場跡のストアハウスで、ダブリン一の展望台からの眺めを楽しみながら、ギネスを飲み交わす、でした）。ここ数年で町中を走る自転車数が激増しているのも特徴的でしょう。陽気で社交的、また和やかなアイルランド人気質は変わりません。